

保健体育科教師の性に関する指導におけるポジショニング

ーポジショニング理論を用いた分析ー

Japanese health education teachers' positioning in teaching sexuality education

泉 彩夏¹⁾ 片岡千恵²⁾ 佐藤貴弘²⁾

キーワード：性に関する指導、保健体育科教師、ポジショニング理論、半構造化面接法

Abstract

The purpose of this study was to describe and explain in-service health education teachers' experiences about teaching sexuality education to students at secondary schools in Kanto regions, Japan. This study used a descriptive qualitative research method, using in-depth interviews within positioning theory. In this study, semi-structured interviews were conducted between February and June 2020. Participants were five health and physical education teachers who taught sexuality education at secondary schools. The data were analyzed using a constant comparative analysis method. Three themes were present: I. challenging experiences in teaching sexuality education, II meeting diverse students' needs in sexuality education and importance of professional development, and III. ingenuity of instruction that takes advantage of online lessons. In order to improve and enhance the quality of sexuality education in the future, Japanese health education teachers should be trained to create positive academic and social relationships by exchanging opinions with students.

1) 筑波大学大学院人間総合科学研究科 2) 筑波大学体育系

I. 緒言

世界的にみて、若年女性を中心とした妊娠中絶や、ヒト免疫不全ウイルス (HIV) を含む性感染症の健康課題が重大な社会問題の一つとなっている中で、学校における性に関する指導の役割は非常に重要と言える。性に関する指導を行う上では、児童生徒に大きな影響を及ぼす教師が、性に関する指導に対して肯定的な意識および指導の自信を持つ必要があることが指摘されている¹⁾。他方で、性に関する指導について、小学校などの早期から実施することについての是非²⁾や、性に関する内容をタブー視する文化的規範が存在することも指摘されており³⁾、性に関する指導を実施することの難しさも存在することは事実である。

そうした中で我が国においては、学校の教育課程において性に関する指導が位置付けられており⁴⁾、児童生徒の心身の調和的発達を重視し⁵⁾、人格の完成や豊かな人間形成を目指して⁶⁾実践されている。また野津⁷⁾は、性に関して様々な問題や多様な価値観がみられる中で、子供が自分自身を大切にする価値観と正しい知識に基づいて、主体的に思考・判断し、適切に行動できる能力を育てることを目標として、性に関する指導を行うことが重要であると述べている。さらに、我が国の性に関する指導の目的は、性の生理的・解剖学的側面についてだけでなく、ジェンダー、人間関係の心理的・社会的側面を含む教育内容を提供することにあることとも言われている⁸⁾。

しかしながら、学校における性に関する指導の内容は、保守的な教師や保護者によって制限されている⁹⁾という指摘が見られることや、授業で使用する教材が十分でない等の課題もある¹⁰⁾。また、保健体育科教師は性に関する指導を実施するにあたって準備が十分ではないこと、現職研修の機会が少ないことなどが指摘されている¹¹⁾。

このような性に関する指導にみられる課題に対して、本研究ではポジショニング理論¹²⁾に着目し、指導する教師の「ポジショニング」、すなわち教師は自分自身をどのように位置づけ、どのような立場で指導しているかについての特徴と課題を見出し、性に関する指導の改善、充実に向けた示唆を得ること

を目的とする。

ポジショニング理論とは、社会的構成主義の考え方による「立場づけ」の概念を説明する理論である¹³⁾。ポジショニングとは、相互作用的なかかわりを会話の視点から分析するものである¹⁴⁾。Davies and Harré¹⁵⁾によれば、自分自身が特定のポジションにあると認識した際には、必然的にそのポジションの視点から世界を見ていると述べている。また、Jones¹⁶⁾は、教師が性に関する内容について教える際には、子供のポジショニングとは対照的、あるいは子供のポジショニングに合わせて、教師自身の気質を分析し、反映することが重要であると指摘している。さらに、信念や思考、判断といったポジションは、教師のこれまでの経験等から影響を受けるものであり、教師の教育に関する行為に影響を与える¹⁷⁾ことも報告されている。これらのことから、ポジショニング理論を用いて教師のポジションを明らかにすることは、教師が性に関する指導をよりよく実践する方略について検討するための一つの方法であると言える。

II. 研究方法

1. 調査の対象および方法

本研究では、複雑な社会的現象を理解することに適したインタビューアプローチ¹⁸⁾を用いた記述的質的研究デザインを採用し、保健体育科教師を対象に半構造化インタビューを行った。

対象は、中学校または高等学校に勤務する保健体育科教師 5 名を対象とした (表 1)。対象の選定にあたっては、性に関する指導を含む保健の授業や体育の授業において、より高い専門性を有する教師を対象とするため、専修免許状を有し、かつ出身の大学または大学院において保健体育科教育学の視点から研究活動を行った経験を有する者とした。選定基準に基づいて調査の協力を依頼し、そのうち同意の得られた者に対して、研究の目的および内容、倫理面への配慮について文書にて説明し、インフォームドコンセントを得た。我が国の性に関する指導は学習指導要領に基づいて実践されており、中学校と高等学校の学習内容には系統性および関連性があることから、本研究では中学校と高等学校の両方の保健体育科教師を対象とした。調査時期は 2020 年 2 月～

表1：対象者の属性

学校種別	仮名	年齢(歳)	性別	教員経験	性教育の授業の担当状況	教員免許	県
高等学校	A	40	女性	15年	担当している	中学校教諭(保健体育)専修免許状 高等学校教諭(保健体育)専修免許状	東京
中学校	B	29	男性	5年	担当している	中学校教諭(保健体育)専修免許状 高等学校教諭(保健体育)専修免許状	茨城
高等学校	C	31	男性	6年	担当している	中学校教諭(保健体育)専修免許状 高等学校教諭(保健体育)専修免許状	東京
高等学校	D	59	男性	39年	担当している	中学校教諭(保健体育)一種免許状 高等学校教諭(保健体育)専修免許状 中学校教諭(保健)一種免許状 高等学校教諭(保健)専修免許状	茨城
中学校	E	33	男性	11年	担当している	小学校教諭一種免許状 中学校教諭(保健体育)専修免許状 高等学校教諭(保健体育)専修免許状	神奈川

6月に、対象者それぞれに対して個別に面接を行った。

調査は、質的研究を専門とする研究者1名および学校保健学の分野における研究を専門とする研究者1名の計2名で実施した。

調査内容については、ポジショニング理論を用いて実施された先行研究^{19) 20)}での質問項目を参考として、性に関する指導に関して作成した14の質問項目から構成したインタビューガイドに基づき、対象者の性に関する指導の実践の経験や意識について尋ねた。具体的には、「性に関する指導に対して、肯定的な考えを持っていますか、あるいは否定的な考えを持っていますか。それはなぜですか。」、「性に関する指導を実践する際に、気を付けていることはありますか。」、「性に関する指導の内容について、どのような意見を持っていますか。」、「性に関する指導を実践する際に、他の教職員に相談したことはありますか。」、「インクルーシブな性に関する指導について考えたことはありますか。」、「性に関する指導は、どのような指導方法が効果的だと思いますか。」、「性に関する指導について、どのような教師教育プログラムが必要だと思いますか。」、「性に関する指導は、今後どのように変化していくべきだと思いますか、あるいは変化していくべきではないと思いますか。それはなぜですか。」などであった。面接の内容は、対象者の承諾を得た上で録音し、トランスクリプトを作成した。面接時間は1名あたり約60-90分であった。また、メールによるフォローアップインタビューを、

インタビューデータについての補足や説明、解説が必要となった場合に用いた²¹⁾。

なお、本調査は、筑波大学体育系研究倫理委員会の承認を得て実施された(課題番号:体019-116、令和元年12月17日)。

2. データ分析

データの分析にあたっては、ポジショニング理論を用いたSatoら^{19) 20)}の方法を参考とした。すなわち本分析プロセスは、データの分析結果を比較しながら解釈を行う継続的比較法によって行われた。具体的には、質的研究を専門とする研究者1名および学校保健学の分野における研究を専門とする研究者1名の計2名それぞれが、各対象者の言語データの中で意味を持つと考えられる部分を抜き出し、コード化を行い、その相違点や共通点を比較するという作業を、合意に達するまで繰り返し行った。本調査から得られた言語データにおいて、主要な用語として、例えば、性感染症、性に関する指導、年齢や発達に応じた適切な行動、学習、スキルといったコードが、用語の組み合わせ(例:身体、身体構造等)につながっているかどうかを検討した。データを比較する過程で、コードを仮のカテゴリーに振り分け、内容を繰り返し検討したものを、「テーマ」としてカテゴリー化し、再分類した²²⁾。

本方法の信頼性については、メンバーチェックとピア・デブリーフィングによって確認された。メンバーチェックとピア・デブリーフィングは、

データの相対的な正確さを判断する目的で行われるものである²³⁾。

メンバーチェックを行うことによって、主観的なバイアスの影響を減らす²⁴⁾ことができることが指摘されている。そこで、インタビューのトランスクリプトと比較検討の中で抽出されたテーマを各対象者に郵送し、トランスクリプトおよび研究者によるテーマの解釈が正確であるかを確認した²³⁾。

また、ピア・デブリーフィングとは、専門の知識を持つ仲間に自分の考えを話し、自身の心の中にある暗黙的な側面を探ることを目的としている²⁴⁾。本研究においては、質的研究の経験のある1名の大学院生によって行われ、データの解釈が正確であるかどうかを判断した。

Ⅲ. 結果

データ分析の結果、3つの主要なテーマが見いだされた。すなわち、テーマⅠ：性に関する指導を行う困難さ、テーマⅡ：生徒の多様性を踏まえた配慮、テーマⅢ：オンライン型授業の長所を生かした指導の工夫であった。

なお、以下の結果の記載については、ポジショニング理論を用いて分析された Sato ら²⁰⁾²¹⁾の方法に従って、テーマごとにそれぞれの代表的なコードを提示しながら記述した。

テーマⅠ：性に関する指導を行う困難さ

本対象者全員が、性に関する指導の意義について理解しており、また性に関する指導に対して肯定的な意識を有していた。しかしながら、性に関する指導を行う際に困難さを感じた経験があると述べていた。具体的には、我が国の文化的背景における身体的なスキンシップについて、男女間の相互の関係性等について等であった。教師B、C、Dにおいては、性に関する事実に基づく情報は、それ自体がセンシティブな事柄であり、独特な要素を持ち、複雑かつ特別な意味合いがあると考えていた。そのため、性に関する内容を教えるためには、教師は特別なスキルを持つ必要があることとともに、性に関する指導を行うことに困難さを感じると述べていた。例えば、教師Cにおいて以下のようなコードが見られた。

“抵抗はあるというか、難しさですね。何をどこ

まで教えていいのかっていうことが正直あります。”

“さわりの知識は教えることはできると思うんですけども、例えば、避妊の用具でコンドームだったりペッサリーだったりピルであったりとかっていう知識は紹介はできると思うんですけども、それらがどういう役割があって適切に使用するかということまで教えることがなかなかできていない。難しいところです。”

“性教育ということで、実際に授業でこういうことをしてみましようみたいなものは正直難しいところがありまして、少しお恥ずかしい話なんですけど、性を題材としてしっかりとした形で実践っていうのがなかなかできていないんですけど、ただ自分の課題意識としてはとても必要だなと思うことも多々あります。人との距離感であったり、男女の関わりとかそういったところも興味が出てくる年代でもありますので、その点も教えていきたいということもあります。”

“男子生徒には僕が教えてとか、女子生徒には女性の先生が教えてとかっていうところもあるので、じゃあそれをどの内容までその先生にお願いするか。養護教諭の先生にアドバイスを求めたりしたんですけども、男女別に授業をやるのかということについてはなかなか難しいですね。”

“(プライベートゾーンなどについての説明をした時の生徒の反応はどうだったかという質問に対して)やっぱりはにかんだりとか…(授業をしたのは)男子生徒だけだったんですけど、プライベートゾーンの話する前に、好きな子とかいるの?とかそういうところから話したんですけど、やはり女の子の話となると思春期もあるかもしれないですけども、やっぱり言いづらそうというところはありますね。そういう話をしているのかという悩みもある。僕というよりは生徒たちがこんな話しているのかなとか、これ恥ずかしいのかなっていうところもあると思うので…”

教師Cは性に関する指導を行うにあたり、妊娠等の自分自身で経験し得ない内容を指導することについて課題を感じ、改善に向けての方略について困難さを感じていたとも述べていた。

また、教師Aにおいて、以下のようなコードが見られた。

“（性に関する指導の実施について）自分が恥ずかしいと思っていると、みんなそれを見てすごい恥ずかしいと思っちゃうというのを後から言われて、こっちは一生懸命頑張ってるけど、なにかを言って私がおどろかしている顔とか、自然にこう、私もまだ若かったんで…”

“私は個人的には、やっぱり教師が自分の性と向き合うような…そういう経験がない人が多いと思うんですよ。結局私たちも日本の性教育を受けて育っているので、結局は自分と向き合うというところが一番根本にあるかなと思います。自分を大事にするとか。だからそれを教師が自分でできていないと、それは教えられないなっていうのはすごく感じるので…。やっぱり教師こそ、その部分を自分でちゃんと向き合っ、それを生徒に話さなくても、それを伝えてというか見せていけるようなのがいいんじゃないかなと思います。”

教師 A は、性に関する指導を実施する際、教師自身が自分の性と向き合うことが重要であると考えていた。

また、教師や生徒の性別属性についてのポジションに関するコードが見られた。例えば、教師 B においては、養護教諭とティーム・ティーチングを行った際に、教師の性別の違いによって、生徒の性に関する内容の受け取り方が異なると感じていた。具体的なコードは以下の通りである。

“自分がやりたいことも伝えたい。あとは女性の方がいたのすごくありがたくて。私が同じ文章を、その女性の先生と同じ文章を読んだとしても、子供たち一人一人の捉え方って 30 人いたら 30 通りあると。女性の方がいてくれたことは自分には心強くて。あとは巻き込んだのは養護教諭なんですけども、保健体育教師っていうイメージ。やっぱり男女がいて、でも養護教諭ってなるとまた立場が違うじゃないですか。まあ、女性だったんですけど、養護教諭は。そうするとなんか、私はこういうニュアンスで言ってるんだけど、子供たちからしたら全くちがうニュアンスで捉えてしまうこと、勘違いされてしまうことがあるのが一番性教育の怖いところで。だからこそ女性の先生もこういうこと、同じ内容を言ってるよねって。私も同じこと言ってるよね、だから全然変なことじゃないんだっていうことが間接的に

伝わるように役割分担をしていたつもりではあります。打ち合わせをして。”

他にも、教師 A や教師 D において以下のようなコードが見られた。

“私が最初にやってた時に、私は女性で、しかも女性の体のこととかあまり抵抗なく言ってしまうと、男子がこっちは見ないでくれみたいな…。本当にそれこそ、終わった後に、「あの授業はマジ、セクハラですよ、先生」とかって…。それで、「どう？みたいなことを絶対に聞かないでくれ」って、それが「すごい嫌だった」とかを言われたりだとか。あとは、本当に何も知らない子が、「先生、勃起って何ですか」って…みんながもう…シーンみたいな…5 秒が 5 分にも感じるぐらいの沈黙みたいな…”（教師 A）

“この年齢までいくと生徒も男としてみない。おっちゃんとしてみているわけ。男としてみたら、恥ずかしくて言えない。性に関して特にね。”（教師 D）

このように、性に関する指導においては教師の性別属性に関するポジションが、生徒の恥ずかしさに関連しているとの考えもうかがわれた。

テーマⅡ：生徒の多様性を踏まえた配慮

本対象者は、性に関する指導を行う際に生徒の多様性への対応に課題を感じたことを述べていた。これに関し、教師 A においては、生徒が性に関する話題を安心して話せるようなコミュニケーションの取り方を意識した個別指導を行っていた。また、教師 D においては、経済的な問題を抱えた生徒に多く対応しており、その中には性に関する過去の行動や、人生の選択を後悔している等、精神的に傷ついている者もいると述べていた。そして、個人に対して性に関する内容を教えることは重要であるが、生徒の文化的、社会的、経済的背景を理解し、安全な性に関する指導についてのさまざまな選択肢を見つけるべきだと語った。具体的なコードとしては以下である。

“学校の先生と生徒間のコミュニケーションがとれていて信頼関係がないことには生徒は言わない子供が多いじゃないですか。そして先生の顔を見ているじゃないですか。だから特に体育の先生の場合には性教育に関わらず生徒といっぱい話をして。”

“ちょこちょこいろんな生徒に声をかけている、自分がね。とにかく全部の生徒と話ができるように、もうしょっちゅう。ただぼけーっと見てるんじゃない、生徒の近くに寄っていったらいろんな話をするというか…”

“「先生、昨日性行為をしました。避妊をしませんでした。ちょっと危ないです。どうしたらいいですか。」「緊急避妊薬を飲みなさい。産婦人科に行って買ってきなさい。15,000円で買える。72時間以内じゃないとだめだよ。」「お金がないんです。」「わかった、貸してあげる。その代わりバイト二十何日にバイトのお金が出るから、その時返してもらえればいいから。それまで貸してあげるから。」そういう女の子一人いた。そう言える環境をちゃんと作っておかないと大変。”

また、教師Bにおいても以下のコードが見られた。

“例えば下半身が麻痺してる、もしかしたら性的な機能を失ってる可能性もありますよね。勃起不全だったりとか。そういう子たちがいた時に知識として、生物学として例えばメカニズムだったりとか、例えば月経の話だったりとか女性だったら。そういう生物学的なお話はやっぱりしてあげたい。ただ、できないっていう心の面ですよ、私はできない、俺はできない、その心の傷を負わせない配慮をどう手立てを取ってあげられるか。例えばどうしても聞きたくない、みんなの前で聞きたくないのであれば一緒に授業を受けないっていう選択肢もあると思うんです。あの、いいのか悪いのかは別として、一緒にいた方がいいっていう立場もあるとも思うんですけど、それはその子自身の判断を一番大事にしてあげたいかなって、あと親ですね、事前にこういう授業をしますよ、こういう内容をやりますけどどうする？っていうことを三者面談なのか、二者面談なのか、管理職も含めるのか、いろいろあると思うんですけど、そういう事前準備の時の配慮はやっぱり顔を合わせた状況で確認をしながら、嫌だ、どうしても一緒に勉強したいというのであれば内容で嫌なものがあればそれは省いたり、とか少し違う形で伝えたりとかっていう事前の準備が必要になってくるのかなって。それが心の傷を無くせるのかなって思いますね。”

さらに教師Bは、障がいを持つ生徒にとって、自

身の指導が男性や女性といった性やアイデンティティについて学ぶ初めての機会となることに気付いたと語った。同時に、自身は、生徒の性に関する興味や関心、理解に大きな影響を与えるポジションにいる、と考えていた。そこで、全ての生徒に社会的なインクルーシブ学習の環境をつくるために、生徒の保護者に対して性に関する授業や活動を行うことについてコミュニケーションを取るといった工夫を行っていた。

テーマⅢ：オンライン型授業の長所を生かした指導の工夫

本対象者は、新型コロナウイルス感染症の影響により、授業形態を急遽、対面型からオンライン型で行うことを余儀なくされていた。そうした中でも対象者の多くは、性に関する指導を効果的に進める上で、オンライン型という指導形態は、多くのメリットがあると考えていた。例えば、教師Eにおいて以下のコードが見られた。

“いい面悪い面、多分絶対あると思うんです。で、結局こう対面で話した時には、やっぱり質問があるのに聞けないっていうケースもあってそのまま流れちゃうっていうケースもあると思う分、オンラインにして例えば、こうやって1対1で話して授業をするのであれば、実際には聞けない部分を聞いてもいいよっていう工夫の仕方はできるかな、ただここで1対36でオンラインにしたときにはまた別かなと…ここでその子が聞きたい発言をしちゃったがために、こうなんかちょっと変な目で見られてしまうって子がいるので、例えば、学校の対面式の授業をしますよって、で、わからないことがあったらオンラインで質問っていうことで1対1です、で理解を深めるっていう意味ではすごくいいところかなと…。1対36でオンラインをしたときには逆に見えないのでこういう作業してますよ、こういうことを書いてますよっていうことが見えなくなってしまう分、やらなくてもいいとかっていうことが生まれてしまうということが懸念されるかなと思います。”

一方で、対面型授業からオンライン型授業へ移行することに不安があったとも語っていた。具体的には、生徒との積極的なコミュニケーションをどのように取ればいいのか、オンライン上で生徒が指示などに従うことができるかというものであった。これ

に関して、教師 A は、オンライン授業で性に関する指導を行う際に、事前に生徒に教材を予習させるという工夫を行っていたと語っていた。以下が具体的なコードである。

“うちは Google クラスルームっていうのを使っているんで、これを観ておきなさいっていう映像とか、例えば教師の中でも、自分が授業しているのとかを撮って、やれなかった分をこうするとか。例えば、私が話している映像とかを配信して、生徒が予習で見ておいて、授業はコミュニケーション取れるようにするとかっていうのも、方法としては、あるかなって。”

IV. 考察

本結果から、性に関する指導における教師のポジションとして、以下の3つの特徴が示された。

一つ目は、性に関する指導を行う困難さであった。本対象においては、性に関する指導について、その必要性や意義について理解しており、他の教師との共通理解についても積極的に取り組んでいる様子が見られた。しかしながら、性に関する内容を教えるにあたり、課題や困難さを感じた経験があったことが示された。こうした結果の背景の一つとして、教師自身や生徒が、性に関する指導の内容について、恥ずかしさや抵抗感を感じていた可能性が考えられる。また、性に関する指導を行う際に、教師自身が困難なポジションにいると認識していることが生徒に伝わり、十分な学習環境を提供できていない経験があったとの回答も見られた。渡部ら²⁵⁾は、学校における性・エイズ教育推進に関わる要因として、「教師の性・エイズ教育の必要性に関する理解」が最も影響力が大きいと、それとともに「教師における性・エイズに対する抵抗感」についても合わせて解決していくことが性・エイズ教育推進にとって効果的であることを指摘している。性に関する指導において、教師の恥ずかしさや抵抗感を可能な限り生徒に表出しないようにすることが重要であると思われる。この点については、教師自身が“男性”または“女性”であるという教師の性別属性に関する認識が、教師自身や生徒の性に関する指導の際の恥ずかしさや抵抗感に関わっている可能性の一つとして考えられた。

二つ目は、性に関する指導を行う際に、生徒の多様性を踏まえた配慮をし、そうした個人に対するアプローチをするという点であった。性に関する指導に当たっての配慮事項⁵⁾の一つとして、子供たちの心身の成長発達には個人差があることから、すべてを集団指導で教えるのではなく、集団指導で教えるべき内容と個別指導で教えるべき内容を明確にし、それらの連携を密にして効果的に指導することが大切であることが挙げられている。そういった中で、本対象においては集団指導、ならびに学習内容の習得状況が十分でないと思われる生徒に対して、補習的に学習支援を行うことや、障がいのある生徒に対する配慮を行うこと、配慮が必要な生徒の保護者との連携等といった個別の対応を行っている状況が示された。このような積極的な取り組みは今後とも推進されるべきである。

他方で、生徒各個人が持つ多様性への対応について課題や難しさを感じるといった認識も見られた。本研究においては、性自認や身体的な特徴だけでなく、生徒の文化的、社会経済的な背景も含まれ、具体的には、社会経済的な要因が児童生徒の学習成果と性に関する行動の意思決定に大きく影響すると考えているという認識が見られた。この点については、教師の中には文化的、社会経済的な理解や多様な性に関する問題に対する見方や認識が異なるため、生徒とのミスマッチが見られること²⁶⁾が指摘されている。また、Arvidson²⁷⁾は、社会経済的な状況には、ソーシャルキャピタルや社会秩序、公権力等が影響し、売春等の複雑な問題に関連する経済的なポジショニングを左右することを指摘している。こうしたことから、男女相互の理解や多様な価値観を、生徒の文化的、社会経済的な背景に応じて対応しながら指導することも重要であると思われた。

三つ目は、オンライン型授業の長所を生かした指導の工夫であった。本対象者においては、新型コロナウイルス感染症の影響により、本研究のインタビュー時期までにオンライン授業を行っている者がみられた。そして、性に関する指導についてのオンライン授業には多くの利点があると考えており、その実践例がいくつか示された。例えば、オンラインを用いることによって、集団指導であっても個別に対応できる機会があり、性に関して不安があったり、

相談したいという希望をもつ生徒に対する個別指導がより容易になる可能性があるという意識がうかがわれた。オンライン授業を通して、性に関して教師と生徒が継続的な内省や会話といった相互作用を通じて、対面型の授業では恥ずかしさや抵抗感などがあつて直接的に話題にしにくいことでも、1対1でのコミュニケーションやチャット機能などでの文字情報の交換などにより、教師は個々の生徒の状況に応えうることがより容易になることが示唆された。

最後に、本研究の研究の限界と今後の課題を述べる。今回の調査対象とした保健体育科教師は、大学院教育において専修免許状を取得しているなど教師として高い専門性を有すると思われる者を目的的にサンプリングしたことから、5名という限られた対象から得られた知見である。今後は、本知見を踏まえながら、学校種別および男女別での分析や教師経験年数による違いなども検討し、多角的かつ詳細な考察が可能な研究デザインによって調査を実施することが望まれる。

V. 結論

本研究は、ポジショニング理論に着目し、性に関する指導に関わる教師がどのようなポジショニングで指導をしているかについての特徴と課題を明らかにすることで、性に関する指導の改善および充実に向けた示唆を得ることを目的とした。調査は、2020年2月～6月に、中学校または高等学校に勤務する保健体育科教師5名を対象として、半構造的面接法により実施した。データ分析には、継続的比較法を用いた。

その結果、本対象の教師において、テーマⅠ「性に関する指導を行う際の困難さ」、テーマⅡ「生徒の多様性を踏まえた配慮」、テーマⅢ「オンライン型授業の長所を生かした指導の工夫」の3つが見いだされた。すなわち、保健体育科教師において、性に関する指導を行う際に困難を感じていること、生徒の多様性を踏まえた配慮をしていること、オンライン型授業の長所を生かした指導の工夫をしていること、という3つのポジションが示された。今後、性に関する指導の改善、充実に向けては、教師が指導の際に困難を感じることの大きな背景となっていると考

えられる恥ずかしさや抵抗感を可能な限り生徒に対して表出しないようにして指導すること、個々の生徒の学習状況だけでなく社会経済的な要因も把握して対応すること、今後オンライン授業にも対応する中で、生徒への発問や意見のやり取りといった相互作用を生み出し、生徒の自己内省を促すことが重要となることが考えられた。

謝辞

本調査にご協力頂いた保健体育科教諭の皆様には厚く感謝の意を表します。

文献

- 1) Peskin MF et al.: Efficacy of it's your game-tech: A computer-based sexual health education program for middle school youth, *Journal of Adolescent Health*, 56(5): 515-521, 2015.
- 2) Gonzalez-Acquaro: Teacher training, sexuality education, and intellectual disabilities: An online workshop, *Current Issues in Education*, 11(9): 1-23, 2009.
- 3) Leung H et al.: Adolescent sexual risk behavior in Hong Kong: prevalence, protective factors, and sex education programs, *Journal of Adolescent Health*, 64(6) Supplement: S52-S58, 2019.
- 4) 中央教育審議会: 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申), 2016.
- 5) 中央教育審議会: 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申), 2008.
- 6) 戸田芳雄: 性教育・エイズ教育, 財団法人日本学校保健会, 平成23年度版学校保健の動向, 165-172, 丸善出版, 東京, 2011.
- 7) 野津有司: 21世紀に向けた学校における性・エイズ教育の在り方, *スポーツと健康*, 30(12): 31-34, 1998.
- 8) 間宮武: 現代性科学性教育事典編纂委員会(編), 現代性科学性教育事典, 小学館, 東京, 1995.

- 9) 橋本紀子ら：日本の中学校における性教育の現状と課題, 教育学研究室紀要:「教育とジェンダー」研究, 9:3-20, 2011.
- 10) McDaniels B et al.: Sexuality education and intellectual disability: time to address the challenge, *Sexuality and Disability*, 34(2): 215-225, 2016.
- 11) Howard-Barr EM et al.: Teacher beliefs, professional preparation, and practices regarding exceptional students and sexuality education, *Journal of School Health*, 75(3): 99-104, 2005.
- 12) Harré R et al.: In R. Harré & L. van Langenhove(Eds.), *The dynamics of social episodes, positioning theory: moral contexts of intentional action*, 1-13, UK: Blackwell, 1999.
- 13) Varela CR et al.: Conflicting varieties of realism: casual powers and the problems of social structure, *Journal for the Theory of Social Behavior*, 26(3): 313-325, 1996.
- 14) Hollway W: 'Gender difference and the production of subjectivity' in Henriques J, Hollway W, Urwin C, Venn C and Walkerdine V, *changing the subject: psychology, social regulation and subjectivity*, 227-263, Routledge, FR, 1998.
- 15) Davies B et al.: Positioning: the discursive production of selves, *Journal for the Theory of Social Behavior*, 20: 43-64, 1990.
- 16) Jones RA: Direct perception and symbol forming in positioning, *Journal for the Theory of Social Behavior*, 29(1): 37-58, 1997.
- 17) Yoon B: Uninvited guests: the influence of teachers' roles and pedagogies on the positioning of English language learners in the regular classroom, *American Educational Research Journal*, 45: 495-522, 2008.
- 18) Seidman I: *Interviewing as qualitative research: a guide for researchers in education and the social sciences* (2nd ed.), Teachers College Press, US, 1998.
- 19) Sato T et al.: Secondary physical educators' positioning of teaching English language learners at Urban schools, *Urban Education*, 1-28, 2018.
- 20) Sato T et al.: Elementary physical educators' positioning in teaching English language learners, *European Physical Education Review*, 25(1): 203-220, 2019.
- 21) Meho LI: E-mail interviewing in qualitative research: a methodological discussion. *Journal of the American Society for Information Science and Technology*, 57(10): 1284-1295, 2006.
- 22) Boeije HR: *Analysis in qualitative research*, SAGE, FR, 2010.
- 23) Merriam SB: *Qualitative research and case study applications in education*, Jossey-Bass, US, 1998.
- 24) Patton MQ: *Qualitative research and evaluation methods*. 3rd ed. Thousand Oaks, CA: Sage, FR. 2002.
- 25) 渡部基ら：学校における性・エイズ教育推進に関わる要因—DEMATEL 法による構造化—, *学校保健研究*, 39 (4) : 308-315, 1997.
- 26) Erickson BH: 'The distribution of gendered social capital in Canada' , In Flap H and Völker B (Eds.), *Creation and Returns of Social Capital*, Routledge, US, 27-50, 2004.
- 27) Arvidson E: Remapping Los Angeles, or, taking the risk of class in postmodern urban theory, *Economic Geography* 75(2): 134-156, 1999.